

# 非当事者攻撃の社会心理学的研究 - 二重不確実性低減モデルの検証 -

著者	熊谷 智博
号	18
学位授与番号	219
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10097/37007">http://hdl.handle.net/10097/37007</a>

くま  
熊

がい  
谷

とも  
智

ひろ  
博

学 位 の 種 類	博 士 (文 学)
学 位 記 番 号	文博第 219 号
学位授与年月日	平成18年6月15日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
研 究 科 ・ 専 攻	東北大学大学院文学研究科 (博士課程後期3年の課程) 人間科学専攻
学 位 論 文 題 目	非当事者攻撃の社会心理学的研究 — 二重不確実性低減モデルの検証 —
論 文 審 査 委 員	(主査) 教 授 大 淵 憲 一      教 授 仁 平 義 明 教 授 行 場 次 朗 助教授 木 村 邦 博

## 論 文 内 容 の 要 旨

現代の国際情勢で頻繁に報告される宗教対立や民族紛争では、紛争被害を直接蒙った訳では無い人々が積極的に紛争に参加し、事態を一層悪化させることが多い。本論文の目的はこの様な、紛争の非当事者が積極的に紛争に参加して、他人に対して攻撃を加える心理過程を解明する事である。

### 非当事者攻撃の事例

非当事者の攻撃参加を理解する為に、酒場にまつわる暴動(ケースⅠ)、サッカーファンの乱闘(ケースⅡ)、家族の詐欺被害に対する怒り(ケースⅢ)、1991年のロス暴動(ケースⅣ)、出身地への中傷(ケースⅤ)、そして旧ユーゴ紛争(ケースⅥ)という6つのケースを取り上げた。次にそれぞれのケースに対して、非当事者が怒りを感じ、攻撃的に振舞う心理過程について議論した。そして、これらのケースに共通する心理過程として、第1にそれぞれのケースの主人公が事件に最初から参加していた訳では無いこと、即ち非当事者である事、第2に主人公はそれぞれのケースにおいて、自分は直接被害を蒙った訳では無いこと、第3には主人公の報復的反応は他人から指示されたり、強制された訳ではなく、自発的・積極的なものであったことが挙げられる。そしてこれら3点の特徴に基づき、筆者は非当事者攻撃を「自分は直接被害を受けていないにも拘らず、他人が受けた被害に対して報復的に攻撃行動を行う事」と定義付けを行った。

## 攻撃の状況的要因

本論文では攻撃を、「他者に危害を加えようとする意図的行動」と定義している。では攻撃行動は如何なる要因によって強まるのか。それには個人的要因(生物学的基盤による特徴や発達初期の気質)、一時的な生理的变化(ホルモンレベル、覚醒水準)、社会的環境(家庭での暴力、貧困とストレス)等が挙げられているが、特に怒り感情は攻撃を強める事が知られている。怒りは通常、他者からの挑発によって生じることが多い。挑発は必ずしも物理的な危害を伴う必要は無く、敵意的な意図や侮辱、軽蔑等の心理的な被害が挑発として攻撃行動を強める要因となる。

心理的な被害が攻撃を動機付けるのは、人々が被害場面に対して複雑な認知処理を行った結果、攻撃を行うか否かを決定している為である。その認知処理には、攻撃を行う事が自分にとってどの様な利益や評価を生むか、或いはどの様な不利益や悪評を生むか、などに対する考慮も含まれる。攻撃を行う事が自分の評判を落とす場合には、人々はそれを抑制するだろうが、男らしさといった肯定的評価を生む場合には、攻撃を積極的に行うこともある。このように他者からの評価が人々の行動に与える影響を扱ったものが社会的促進の研究である。

社会的促進とは単に他者が存在するだけで人々の行動に変化が生じることである(Cottrell, Wack, Sekerak, & Rittle, 1968; Duval & Wicklund, 1980)。他者の存在によって評価懸念や理想自己への関心が強まった結果、自己意識が強まり、内面化された価値観や規範に従った行動が強められる。従って、攻撃が好ましい評価を生むと考えている人は、他者存在によって攻撃行動が促進されると考えられる。この理論は、非当事者攻撃にも当てはまるだろうか? 加害者を攻撃することによって肯定的評価を得られると非当事者が考えているならば、他者存在が非当事者攻撃を強める可能性も考えられる。しかし社会的促進理論ではその様な規範を人々が如何に獲得するかについては説明が出来ない。また本論文で取り上げた非当事者攻撃のケースの幾つかでは、非当事者は被害者から既に十分に高い評価を受けている(例えばケースⅢ)。これらの点から、非当事者攻撃は社会的促進によっては説明できないと判断した。

## 集団過程と非当事者攻撃

非当事者攻撃のケースを見ると、それが起こる時、被害者と非当事者は全くの他人では無い。通常、その両者は同じ集団の成員である。そこで集団の観点から非当事者攻撃の意味を検討する必要がある。集団心理の1つは同調圧力である。同調とは、集団規範によって期待される行動をとることである。同調圧力は非当事者攻撃の原因でありうるが、問題は、匿名状態にある時は同調が低下することである(Deutsch & Gerard, 1955)。しかし、非当事者攻撃は非当事者が匿名状態にあっても生じる(例えばケースⅤ)。この事は、非当事者攻撃を同調の観点からだけでは説明できないことを示している。

集団心理の別の側面は脱個性化である。脱個性化とは、集団に埋没して個人として同定されにくい状態が責任の拡散と自己意識の低下を招く現象である。その結果、人々の攻撃性が強まることは多くの研究において報告されているので(Zimbardo, 1970; Jaffer & Yinon, 1979)、その1つの現れが非当事者攻撃である可能性はある。脱個性化は自己意識の低下による攻撃促進をそのメカニズムとして仮定する。それは、社会的促進同様、既に非当事者が攻撃的である場合には攻撃を強めるかもしれないが、筆者があげた例で分かるように、非当事者攻撃にはそうでないケースもある。それ故、やはり脱個性化だけでは非当事者攻撃の説明は十分ではない。同調や脱個性化が非当事者攻撃の説明として不十分な点は、それらが攻撃を促進する可能性はあるが、攻撃の動機付けを説明出来ない点である。

集団とは人々の集まりを何らかの基準によってカテゴリー化したものである。人々はある対象をカテゴリー化するとその差異を強調することが知られている。これは集団間においても同様であるが、人々

は特に内集団を外集団よりも肯定的に認知しようとする傾向がある(集団間差異化)。人々が集団間差異化を行うのは、内集団をより肯定的に認知する事によって、その成員である自己の自尊心を高める為である。その1つの手段として他集団を攻撃して、自集団の優位性を明確にしようとする事が考えられる。筆者は、非当事者攻撃はこのタイプの動機付けによるものではないかと推論した。しかしこの推論にも重大な問題がある。それは、人々は集団間差異化のために自集団を肯定的に認知することがあるが、他集団を否定的に認知しようとししないことである(Mummendey & Otten, 1998)。このため、攻撃による優位性の誇示は集団間差異化の手段としては一般には不適切と考えられる。従って、この段階で、非当事者攻撃を集団差異化によるものと結論づけることはできない。

集団間差異化の心理は、人々が集団間の評価に強い関心を払っている事を示している。また、個人が外部からの否定的評価に対して攻撃的に反応する事については既に述べた通り、多くの理論と研究がある(Donnerstein, Donnerstein, & Evans, 1975; Katz, 1988; Richardson, Leonard, Taylor, & Hammock, 1985)。この原理を集団に適用するなら、自集団が外部から否定的評価を受けた場合、集団成員がこれに対して攻撃的に反応すると予測することが可能である。ただし、それは、集団成員がその集団に強く同一化し、集団に対する否定的評価を自己に対する否定的評価と知覚する必要がある。

ここで、非当事者攻撃を生起させる重要な集団心理変数として、集団同一化が浮かび上がってきた。集団同一化の意味については様々な定義があるが(Brewer, 1991; Hogg & Abrams, 1988)、筆者は、「集団や社会的カテゴリーが形成するプロトタイプへの自己概念の近接の程度」と定義するのがもっとも適切であると考えた。集団理論は集団同一化が人々の認知、感情、行動、そして攻撃行動に影響を与える事を論じてきた。集団間感情理論に基づく研究(Mackie, Devos, & Smith, 2000)は、人々が個人的な被害ではなくても、集団間での事象に対して感情的に反応すること、特に集団同一化が強い時にこうした集団間感情も強くなることを明らかにした。この知見は非当事者攻撃の理解にとって重要である。なぜなら、強く集団同一化している人は、集団間関係によって怒り感情が喚起されたとき、それが非当事者攻撃を促すと推論することができるからである。

集団同一化を強める要因として、Jackson and Smith (1999) は、(1)集団間文脈の知覚、(2)内集団の持つ魅力、(3)相互依存の信念と共通運命、(4)脱個性化の4次元をあげた。しかし筆者は、関連研究の結果を分析し、これら以外にも集団同一化の要因があると考えた。それは、実存恐怖(自分はいつか死に、存在しなくなる事への恐怖感)と不確実性である。

#### 非当事者攻撃の二重不確実性低減モデル

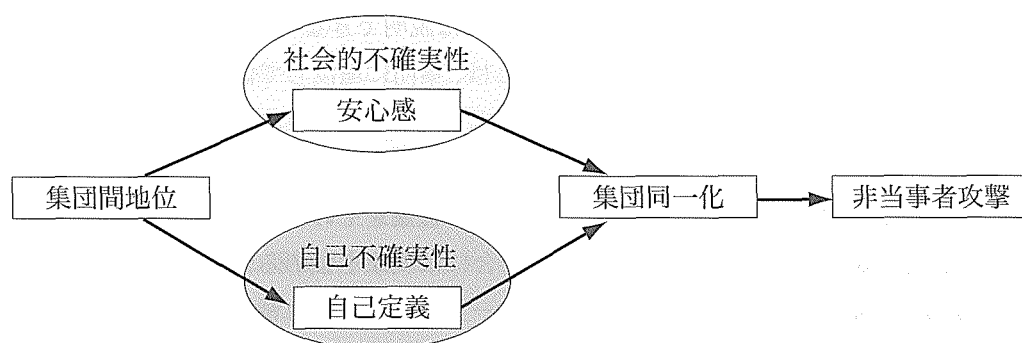


図1 非当事者攻撃の二重不確実性低減モデル

筆者は、これら6個の集団同一化要因を、その性質と相互の関連性から、集団間地位、安心感、自己定義の3要因に再統合した。それらはいずれも個人に対して集団所属の魅力を提供するものであり、それ

によって個人の集団同一化を促すものである。

集団同一化に関する研究は、集団成員間の類似性が集団同一化を強める事を報告している (Brewer, 1991, 1993; Brewer & Pickett, 1999)。これは態度や行動の類似性が、自己の態度や行動の社会的な適切さを保証するものとして認知される為である。集団成員間の類似性は、集団規範となって集団成員同士の対人関係上の不確実性 (社会的な不確実性) を低減し、人々に安心感を与える。その結果集団の魅力は強まり、集団同一化も強まると考えられる。また、人々は、しばしば自分が何者であるかについて自己不確実感を抱くことがある。集団は集団プロトタイプという情報を個人に提供し、これが彼らの自己不確実性を低減し、自己定義を促進する。それが集団所属を魅力的にし、集団成員の同一化を促すと筆者は仮定した。

このように、安心感要因と自己定義要因は2種類の不確実性低減をもたらすものであるが、集団間地位の要因は、これらに影響を与え、その効果を通して間接的に集団同一化を強めると筆者は仮定した。安心感要因に対しては、集団間地位から生じる肯定的評価が影響する。集団のもつ肯定的評価はその成員に対しても肯定的評価となる。そして肯定的評価の高い者は他者から受容されやすい。受容は他者の反応の手掛かりになるので、それだけ社会的な不確実性を低減することが出来る。その結果安心感が強まり、集団同一化が強まると仮定した。一方、外集団との相対的地位の差異は、内集団成員の特徴を顕現させ、それは成員の自己概念の形成を促し、自己不確実性の低減に寄与する。このように、集団間地位は2種類の不確実性低減を促し、その結果、集団同一化の強化に貢献すると考えられる。

こうして集団間地位、安心感、自己定義の3つの要因は集団同一化を強める。そして強められた集団同一化は、集団間感情理論に基づいて論じたように、内集団への否定的な評価に対する人々の反応を強める。その結果、非当事者攻撃が動機付けられると筆者は仮定した (図1)。本論文ではこの非当事者攻撃の二重不確実性低減モデルの妥当性を、14個の実証的研究によって検証した。

### 非当事者攻撃の二重不確実性理論低減モデルの検証：集団間地位要因の効果

研究1では、実験参加者は他の参加者と実験室で一時的に集団を形成した後、集団間地位の操作として、社会的に肯定的な評価を受ける集団に所属していると説明された。その後その集団の成員が他集団の成員から被害を受ける様子を観察した。そして参加者は、他集団成員に罰として不快なノイズ音を聞かせる機会を与えられた。その際に選択されたノイズの強さが攻撃の測度として用いられた。結果は、人々は自分が被害を受けていなくても、肯定的な評価を受ける集団に所属している時には、その集団の成員が受けた被害を観察するだけで、加害者に対する攻撃を強めた。研究1は、このように、非当事者攻撃を実験室において再現することに成功した。

研究2において、二重不確実性低減モデルにおいて仮定された心理社会過程、即ち、集団間地位が安心感要因と自己定義要因を媒介して集団同一性を強めるという過程を、質問紙を用いて検証した。パス分析の結果は、仮定されたパスが全て有意な効果を示しており、このモデルの予測に一致したものであった。

### 非当事者攻撃の二重不確実性理論低減モデルの検証：自己定義要因の効果

次に、自己定義要因が集団同一化を介して非当事者攻撃を強める過程を実験的に検討した。研究3では、参加者に自分が普段所属している集団を出来るだけ多く列挙させた後、被害者が別の外集団成員から不平等な分配を受ける様子を観察させ、更に、その不平等な分配を行った者に対して、不快なノイズ音を与えさせた。その結果、被害者が内集団成員の場合には、所属集団を列挙した参加者はしなかった参加

者よりも、不平等な分配者に対して強いノイズを与えた。所属集団を列挙する事は参加者の関心を社会的自己概念に向け、このため、彼らは実験場面で一時的に形成された集団を自己定義情報として利用したものと考えられる。これによって彼らの集団同一化が強められ、内集団に対する被害を自己への脅威と知覚して、分配者への攻撃性を強めたと解釈されるので、この研究結果は筆者のモデル予測を支持するものである。

研究4で実存恐怖を喚起するために、参加者にホロコーストの映像を観せ、その後、内集団成員同士で共同作業を行わせた。それ以降は研究1と同じである。結果は、実存恐怖を喚起された参加者の内、内集団同士で協力を経験しなかった群は、協力を経験した群よりも外集団成員に対して強いノイズを与えていた。協力経験の効果は予測とは逆のものだったが、筆者は、実存恐怖によって自己不確実性が高まった参加者は一時的に集団への同一化が強まり、それが非当事者攻撃を強めたが、協力経験が実存恐怖の効果を打ち消したために非当事者攻撃が減少したと解釈した。

### 非当事者攻撃の二重不確実性理論低減モデルの検証：安心感要因の効果

研究5では、2001年ニューヨークでのテロ事件後、市民を対象に質問紙調査を行った。その結果、アメリカ国民としての同一性を強く持つことと社会不安の低さには相関関係が見られた。このことは、集団所属が社会的な不確実性を低減し、安心感を与えていることを示唆するものである。また、集団同一化の強さと向社会的行動との間に相関関係が見られた。向社会的行動はアメリカ国民という集団成員としての行動と考えられるので、集団同一化が集団行動を促した事を示唆している。

研究6では実験室場面で安心感要因を操作し、非当事者攻撃に与える影響を検証した。参加者は他の参加者から集団成員として拒絶された後に、それ以外の実験参加者の内の1人が、参加者を集団成員として受容しているという意見が伝えられ、その参加者と残りの課題を一緒に行った。その後は研究1と同じである。内集団の成員から受容された参加者はそうでない参加者よりも、内集団成員に危害を加えた者への攻撃を強めた。この現象は、事前に他の参加者から拒絶されていた参加者にのみ観察された。筆者は、この結果を、理論モデルに従って、受容感から生じた安心感が集団同一化を強め、内集団成員の受けた被害に対して脅威を感じ、非当事者攻撃をより強めたと解釈した。

研究7及び研究8では、安心感要因の効果の内、被害の認知に焦点を当てた。研究7において、協力経験によって安心感を高められた参加者は、内集団の受けた被害に対して自分も脅威を知覚し、それによって加害者に対する攻撃行動を強めた。研究8では、半数の参加者は、内集団成員が出来の悪い作品を作成し、それに対して悪い評価を他集団から受ける様子を観察した。残りの半数は内集団成員が出来の良い作品を作成した。その後は研究1と同じである。その結果、内集団の作品の出来が良かった時の方が悪かった時よりも、参加者は外集団成員に対して強い攻撃を示した。これは物理的被害が同じでも、それを不公正と認知するかどうかで攻撃の強度を左右することを示唆している。

### 非当事者攻撃の二重不確実性理論低減モデルの検証：社会的公正の効果

Lind and Tyler (1988) の集団価値モデルによれば、集団内の公正な処遇は尊重されているという感覚を強めて成員の集団同一化を強める。尊重の感覚は非当事者攻撃の二重不確実性低減モデルの安心感要因に当たる。従って社会的公正は非当事者攻撃を強めると予測し、研究9において検討した

研究9では自尊心という個人差を取り上げ、特性自尊心の低い人は心理的脅威に対して敏感に反応するので、非当事者攻撃も強いと予測した。参加者は特性自尊心を測定した後、グループの成員間で宝くじの分配を行った。半数の参加者は他の成員から平等な分配を受け、残りの半数の参加者は不平等な分

配を受けた。その後は研究1と同様である。その結果、筆者の予測通り、内集団から平等な分配を受けた参加者の方が、不平等な分配を受けた参加者よりも集団に強く同一化していた。また内集団から平等な分配を受けた参加者の内、特性自尊心の低い参加者はより強い攻撃を行っていた。更に、研究10では、被害者が外集団成員の場合には、同じ状況でも非当事者攻撃が生じないことを確認した。

研究11は非当事者攻撃が、集団からの公正な処遇ではなく、自分に平等な分配を与えた個人に対する好意によって生じたのではないかという代替仮説の排除を試みた。集団を3人集団とし、平等な分配を行う成員と不平等な分配を外集団から受ける成員をそれぞれ別の成員とした。更に、単に集団を形成しただけの最小集団条件を統制群として設けた。それ以外の手続きは研究10と同一である。結果は集団同一化に関しては、平等な分配の群は不平等な分配や最小集団の群よりも高い集団同一化を示していた。従って単に平等に分配するだけで人々は集団に対する同一化を強めていると解釈した。そして非当事者攻撃の結果は研究10と同じであった。平等な分配によって強まった非当事者攻撃は、平等な分配をした個人に対する好意ではなく、集団同一化によって集団間被害を知覚して報復を動機付けられた結果であると解釈した。研究12では、研究10の知見を手続き的公正の点から追試した。半数の参加者は意思決定の際に集団のリーダーから意見を求められ、残りは求められなかった。その後は研究10と同じである。結果は発言機会を与えられた参加者は集団同一化を強め、被害者が内集団成員の場合にのみ、他の条件よりも攻撃行動を強めていた。これは発言機会を参加者が公正な処遇として認知し、集団同一化を強めたと解釈した。また、参加者は内集団への不平等を自己への脅威として知覚し、非当事者攻撃を強めていた。

本論文では集団同一化が非当事者攻撃に必須の集団変数であると仮定している。しかし、他の説明の仕方もあり得る可能性がある。1つは被害者への同情反応、もう1つは集団からの規範的期待による影響とするものである。研究13と研究14では、これらの代替説明を検討した。研究13では内集団が不平等な分配を受ける様子を観察する際に、被害者本人は不平等な分配に対して満足している事を参加者に伝えた。もしも非当事者が被害者への同情から攻撃を行っているのであれば、被害者自身が満足しているという情報は、非当事者の攻撃行動を弱めるであろう。研究14では、集団リーダーが強い不満を抱えていることを参加者に伝えた。もしも、非当事者攻撃が集団の規範的期待に対する同調であるならば、リーダーのこうした意見が攻撃を強めると考えられる。結果をみると、被害者の低不満感もリーダーの意見もどちらも非当事者攻撃には影響しなかった。むしろ、これまで研究と同様、集団同一化を強められた参加者がそうでない参加者よりも強い攻撃を行うことが観察された。これらの研究結果は、それ故、非当事者攻撃にとって集団同一化に不可欠の動機変数であることを示している。

## 総合的考察

14個の実証研究によって非当事者攻撃の二重不確実性低減モデルを検証した結果、予想外の結果も見られたが、集団間地位、安心感、自己定義などの要因が集団同一化を介して非当事者攻撃を強めるという筆者の予測はおおむね支持され、これは、このモデルが一定の妥当性を持つことを示唆するものである。

これらの検討を通して、非当事者攻撃については以下の3点が明らかになった。第1に、非当事者は内集団が受けた被害に対して反応しているが、必ずしも被害者と同一の認知過程がはたらいっているわけではない。非当事者は被害に対してはそれを歪曲せずに、客観的に知覚していた。むしろ、非当事者は集団同一化を通して攻撃的態度を強めることが一連の研究を通して明らかにされた。第2に、被害者が内集団成員の場合に攻撃が強められることから、非当事者攻撃が筆者の仮定した通り、社会的アイデンティ

ティへの脅威によって動機付けられていた事が明らかにされた。そして、第3に、被害者の感情反応が非当事者攻撃に対して影響しないことから、非当事者攻撃が被害者への同情では無く、非当事者は集団同一化の結果、自分自身が被害を受けたと認知し、自己の問題と認識して反応した結果、攻撃を行うことが明らかになった。

本論文は、通常誰もが備えている集団同一化という心理過程には、民族紛争に見られるような酷い攻撃行動を引き起こす可能性がある事を明らかにした。その結果、世界で見られる民族紛争は、人種や宗教に特有の現象ではなく、日本にいても生じる可能性がある事が示された。非当事者攻撃の心理過程で重要な要因である社会的不確実性、自己不確実性は共に人々の基本的な欲求である事からその解決は困難であると予想される。本研究はそれらの問題の心理的基盤の理論化と解明に一定の寄与をしたと言えるであろう。

## 論文審査結果の要旨

世界各地で発生している宗教対立や民族紛争では、しばしば、紛争被害を直接に被ったわけではない人々が積極的に紛争に介入し、事態を一層悪化させることが起こる。論者は、このタイプの行動を『非当事者攻撃』とよび、これを「自分は直接被害を受けていないにも拘らず、他人が受けた被害に対して報復的に攻撃行動を行う事」と定義した。本論文は、この現象の心理社会的過程を理論的及び実証的に解明することを試みたものである。

論者は、まず、6種類の典型的なエピソードを取り上げて分析し、そこから、非当事者攻撃現象の特徴として、(1)行為者は紛争事件に最初から関与していたわけでない、(2)行為者は直接に被害を被っていない、(3)行為者の報復行動は自発的なものである、(4)被害者と行為者は全くの他人ではない、という4点を抽出した。最後の点から論者は、この行動のメカニズムが集団過程に根ざすものであるとの着想をえ、この点からの理論的解析を試みた。非当事者攻撃をもたらしうる集団心理として、論者は、同調圧力、脱個性化、集団間差異化、集団同一化を取り上げ、従来の理論や知見を参照しながら、これらを理論的に検討した。同調とは、集団規範に沿った行動を取るよう社会的圧力を感じることであり、脱個性化は集団状況による自己意識と抑制の低下をもたらす。また、集団間差異化は自集団の優位性を求める願望を含んでいる。これらの集団過程は、他集団を排斥したり攻撃したりする行為を集団成員に動機づけるので、非当事者攻撃を生み出す可能性はある。しかし、論者は、これらによってすべてのタイプの非当事者攻撃が説明されるわけではないとして、より本質的な集団変数の探索を進めた。その結果、論者が注目したのは集団同一化 (group identification) である。

集団同一化とは、「集団や社会的カテゴリーが形成するプロトタイプへの自己概念の近接の程度」と定義される。社会心理学者たちは、人々が個人的な被害だけでなく集団間の事象に対しても感情的に反応すること、特に、集団同一化が強い人ほどこうした集団間感情が強いことを示してきた (Mackie et al., 2000)。そこで論者は、集団同一化こそ非当事者攻撃の必須要因であると仮定し、両者の関連性について、図1のような理論モデルを構築した。

集団同一化を強める安心感要因とは内集団成員間の類似性認知や集団規範のことで、これらは成員同士の凝集性を強め、これによって対人関係上の不確実性 (社会的な不確実性) を低減する。もう一つの要因である自己定義とは、集団が集団プロトタイプという情報を成員に提供して彼らの自己定義を強固なものにさせ、これによって自己不確実感を低減させるというものである。これら2要因は集団帰属の魅力



となり、集団成員の自己同一化を促すとされる。

集団間地位とは、他集団に対する優位性や集団間差異化のことで、これらは先の2要因に影響を与え、間接的に集団同一化を促す。論者はこの理論モデルに基づいて、合計14個の実証研究を企画・遂行し、非当事者攻撃の心理・社会的メカニズムを探った。

研究1では、実験参加者をグループ化し、この集団に肯定的評価を与えるかどうかで集団間地位を操作した。その上で、集団成員が他集団から危害を加えられたとき、参加者がこれに報復するかどうかを観測したところ、高地位集団に属する参加者に強い報復行動が見られ、非当事者攻撃が集団間地位によって影響されることを実験室研究によって証明した。これに続いて論者は、研究2から研究5において、所属集団名を列挙させる、あるいは実存恐怖を喚起するなどの手続きを用いて自己定義要因を実験場面に導入し、理論モデルにおいて予測されたように、それらが非当事者攻撃を強めることを見いだした。

次に論者は、研究6以降の研究において安心感要因に焦点を当てた。まず、内集団成員からの受容、内集団成員に対する危害の不当性などを実験場面で構成し、これらがやはり非当事者攻撃を強めることを確認した。安心感要因の中でも論者が特に重視したのは社会的公正である。手続き的公正の研究では、集団内での公正な処遇が尊重の感覚を生み出すことが強調されてきた。論者はこれを安心感要因とみなし、研究8から10、それに研究12において、公正処遇を実験参加者に経験させ、それが彼らの非当事者攻撃を促進することを見いだした。

実証的知見は、たとえ研究者自身の仮説と一致したものであっても、これを別の観点から解釈することが可能な場合が少なくない。そこで論者は、研究11から14において、被害者に対する個人的好意と同情、規範的期待と同調など、いくつかの代替仮説の検討を試み、非当事者攻撃現象がこれらによっても十分に説明できないことを明らかにし、集団同一化が必須要件であることを再確認した。これら一連の実証研究は、論者がその二重不確実性低減モデルにおいて仮定したように、社会的な不確実性及び自己不確実性を低減させる諸要因が集団同一化を強め、そうした条件のもとにある参加者は同僚の被害に対してより強く反発することを示したが、このことは、不確実性の低減を求める人間の基本的欲求が非当事者攻撃の背後に存在することを示唆するものである。

しかし、こうした努力にもかかわらず、論者が行った研究のいくつかでは、二重不確実性低減モデルでは説明できない予想外の結果も見られた。また、理論面では、安心感要因と自己定義要因の関連性について不明確さが残ったままであったし、社会的公正の位置づけにも疑問がないわけではなかった。しかし、こうした疑問点や不明確さは、このモデルの欠陥であるというよりも、これを更に修正・発展させることによって、非当事者攻撃の理論をより精緻なものに仕上げていく可能性を示唆するものと考えることが出来る。

本論文は、集団間紛争に対して非当事者攻撃という独自の切り口を設定し、従来の集団理論を精査した上で、その心理社会過程に関する理論モデルを構築、実験を中心にした一連の実証的研究によってその検証を試みたものである。その成果は、集団同一化とこれに結びついた人間の基本的欲求が集団間紛争の一因であることを、説得力を持って示すものであり、心理学だけでなく、紛争を扱う社会諸科学に対して広く貢献しうる価値を持つものと言えよう。よって、本論文の提出者は、博士(文学)の学位を授与されるに十分な資格を有するものと認められる。